（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	佐々木　太郎
論文題目	国際政治の見失われた次元　―　対外政治工作の一類型としてのソ連の「影響力」工作　―		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、序章と終章（結論）を含む、全2部、全9章から構成される。

序章では、影響力を持った個人を利用することで、相手国の世論や政策を秘密裡に誘導して自国の国益に沿う行動を取らせることを狙った政治工作である影響力工作を、ソ連が両大戦間期（特に1930年代）から1940年代半ばにかけて世界各地で展開していたことを仮説として提示し、それを証明することによって、ソ連の対外革命戦略の一端を解明することが、本論文の主たる目的であること等が示されている。

第1部においては、ソ連の影響力工作を分析するための理論的な枠組みについて広汎に検討がなされている。

第1章では、冷戦時代にソ連が相手国に影響を与えるために行った「アクティブ・メジャーズ」と呼ばれる工作形態について考察され、この工作の手法の一つとして、「エージェント・オブ・インフルエンス」なる影響力を持った協力者を用いる工作があったことが紹介されている。

第2章では、冷戦時代におけるソ連の国家保安委員会（KGB）の「エージェント・オブ・インフルエンス」概念について検証がなされ、その基本的なタイプには、「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」、「ウィッティング・コンフィデンシャル・コンタクト・オブ・インフルエンス」、「アンウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」の3種類あることが論証されている。

第3章では、両大戦間期から冷戦時代にかけてソ連の影響力工作に用いられた「エージェント・オブ・インフルエンス」の要件が措定されている。

第4章では、共産主義運動に何らかの形で関与した人々のタイプについて精査することを通じて、ソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」の類型を細かく分類すれば21種類存在することが導き出されている。

第2部においては、第1部で得た知見をもとに、ソ連の影響力工作について具体的に検証され、両大戦間期から1940年代半ばにおいてソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」となった人物の活動実態が明らかにされている。

第5章では、孫文の妻で政治家でもあった宋慶齢について検証がなされている。ここでは、中国国民党による共産主義者への弾圧に反対する抗議活動等を組織的に展開していく中で、宋がソ連の「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」とし

ての役割を果たすようになったことや、宋の側近として活動したアメリカ人ジャーナリスト、アグネス・スメドレー（Agnes Smedley）も、ソ連の「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」であったことが明らかにされている。ただ、スメドレーは人々をつなぎ合わせて組織化していくという、いわば〝コーディネーター型〟の「エージェント・オブ・インフルエンス」であったが、宋はそのように組織化された運動の最上段に看板として据えられた、いわば〝広告塔型〟の「エージェント・オブ・インフルエンス」であったことも論じられ、この二者の類型化が試みられている。

第6章では、ドイツ共産党員であったオットー・カッツ（Otto Katz）について検証が行われている。ここでは、カッツは、コミンテルンの国際フロント組織活動において、＜コーディネーター型＞の「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」としての役割を果たし、欧米の知識人や文化人を中心に多くの人々を反ファシズム運動に糾合したことが論証されている。

第7章では、ソ連秘密警察による影響力工作の起源について、アメリカを例に考察がなされている。ここでは、同警察が同工作の重要性に注目したのは1938年6月頃と比較的遅く、成果もほとんど上げることができなかったが、そうした中でジャーナリストのブルース・ミントン（Bruce Minton）が＜コーディネーター型＞の「エージェント・オブ・インフルエンス」として世論誘導を図ったことが示されている。また、米財務省高官のハリー・デクスター・ホワイト（Harry Dexter White）はアメリカによる対ソドル借款問題において、「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」あるいは「ウィッティング・コンフィデンシャル・コンタクト・オブ・インフルエンス」としての役割を果たしたことが明らかにされている。さらに、ホワイトはいわゆる＜スパイ活動＞から入り、財務省内で出世して影響力を行使できる地位になって影響力工作に携わった人物であるので、＜出世型＞の「エージェント・オブ・インフルエンス」と言える存在として類型化されることが指摘されている。

終章では、以上の成果から、ソ連が諸外国の国民や政策決定者の知覚を秘密裡に誘導してソ連の国益に沿うような行動を取らせる対外戦略を、両大戦間期から世界規模で用いていたと結論付けられている。他方で、本論文で特定した者達以外にも、多くのソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」が存在する可能性が高いことにも留意する必要性が示されている。また、ソ連が両大戦間期から世界に先駆けて着手した影響力工作の経験が、冷戦時代における影響力工作の礎となって、引き続き同国の国益追求の営みに活かされたことが示されている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、従来の国際政治史研究あるいは情報史研究において未解明であった、両大戦間期から1940年代半ばにかけてのソ連による影響力を用いた対外政治工作活動について、客観的かつ実証的に考察を試みた意欲的な論文である。

当該分野における研究がこれまで進展しなかった背景には、資・史料的制約があるが、本論文は主にソ連崩壊以降に世界各国で公開が進むようになった情報機関の内部文書等、多くの公文書を発掘・渉猟して広汎に利用し、マルチ・アーカイバルな手法で研究を進めることでその障害を取り除いている。たとえば、イギリスの防諜機関であるMI5の捜査資料（KV文書）は近年になり公開され始めたものであるが、本論文はその中の「オットー・カッツ文書」をはじめとした多くの関連文書にきめ細かく当たっている。また、アメリカの防諜機関であるFBIに開示請求を行うことで入手した捜査資料も多く用いられている。他方、ロシアにおいて情報機関史料は現在においても固く秘匿されており一般の研究者が閲覧することは事実上不可能な状態であるが、本論文はアメリカ政府がソ連の暗号電文を長年にわたって傍受・解読した文書（ヴェノナ文書）や、元ソ連秘密警察諜報官がソ連国外に持ち出した大量の内部文書の写し（ヴァシリエフ文書）等を広汎に利用している。これらの他にも、ソ連共産党の中央委員会政治局文書やコミンテルン文書をまとめた公刊史料集、アメリカ連邦議会の各種委員会史料等の文献が用いられている。膨大な資・史料を分析することを通じて、各国に対するソ連の影響力工作の実相を明らかにしようとした申請者の努力は評価できる。ただし、依拠した文書の多くが情報史料という特殊なものである以上、一層の注意を払って史料批判を行い、十分な説明を逐一付記すべき箇所もある。

本論文は、ソ連が冷戦期以前において世界各地で利用した「エージェント・オブ・インフルエンス」の実態を実証している。従来の情報史研究では、「エージェントとは何か」というような基本的な概念規定が行われないままに議論が進められる場合が珍しくなく、研究者同士の建設的な対話も阻害されてきたという問題があった。対して本論文は、「エージェント・オブ・インフルエンス」をはじめその関連概念について、冷戦時代のKGBの認識を細かく分析することで解明している。そのうえで、共産主義運動に何らかの形で関わった人々のタイプとソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」概念との関係について理論的に細かく分類がなされている。また、両大戦間期におけるソ連の情報活動のあり方や、対人的な影響力についての社会心理学の諸研究、世界各地における対外戦略思想の歴史的事例にも目を配ることによって、両大戦間期から冷戦期にかけてのソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」が類型化されており、単なる情報史研究にとどまらない学術的視座を提供し

ている。

さらに、本論文はソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」として活動した人物に焦点を当てることで、新事実を発掘し、従来の研究にはなかった視点と解釈を提示している。たとえば、宋慶齢を取り上げた部分では、宋が共産党に入党していたのか否かというような従来の党史研究における議論の枠組みから抜け出て、彼女がソ連のエージェントとして影響力工作に従事していた事実を明らかにしている。また、ドイツ共産党員のオットー・カッツについては、イギリスやアメリカにおける活動を辿ることで、彼がソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」としての役割を果たしていたことを浮き彫りにしている。くわえて、ソ連秘密警察の対米影響力工作の起源を探った部分においては、ソ連秘密警察のモスクワ本部と在米支部の活動方針の変遷を分析するとともに、ジャーナリストのブルース・ミントンや米財務省高官のハリー・ホワイト等による影響力工作についても取り上げ、米ソ関係史研究の新機軸を打ち出している。

本論文の課題としては、研究対象とする時期の指定が幾分曖昧であるという点があげられる。また、ソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」の類型について掘り下げが十分でなく、検討されていない新たなタイプが存在する可能性もある。さらに、そもそもソ連の影響力工作というものが、ソ連外交においてどのように位置付けられるのかという点についても言及されていない。同工作が与えたインパクトを客観的に計測することができるのかという点について、取り上げられていないことも不満の残るところではある。とはいえ、本論文の主要な関心が冷戦期以前の時期においてソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」の要件を満たす人物の活動実態を解明することにある以上、上記の課題は副次的なものであり、本論文の価値を何ら低めるものではない。

以上を総括すれば、本論文はいくつかの課題を残しながらも、従来の国際政治史研究や情報史研究において看過されてきた問題に真正面から取り組み、多くの重要な学術的貢献を行っていると評価できる。念入りな理論構築にはじまり、中国・ヨーロッパ・アメリカにおけるソ連の活動を事例研究として取り上げ、この浩瀚な論文をまとめあげた申請者の力量と研究の実証性は際立っており、十分評価できるものである。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年1月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版に関わる事情が許すまでのあいだ、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降